

## 8 災害にもなう病害虫

麦栽培のタイプは、水田転作用麦と、従来からの畑栽培に大別される。災害の種類によっては、水田作麦のみ被害発生となり、雨、風被害は畑にも発生する。しかし、一般的には、麦に対する悪影響を及ぼすのは、風、雨、湿害が主なものである。これらのうち、主要な病原体は、糸状菌類であり、バクテリア、マイコプラズマ様微生物、ウィルス類、センチュウ類はほとんど関与しない。

### (糸状菌の一般的性質)

麦類への寄生糸状菌(ギベレラ属)、うどんこ病菌(エリシエフ属)などである。他のカビ類は気象災害に関係のない種類のものが多い。

カビ類の一般的性質は、麦の病害にも同様の傾向があり、気象災害のために弱った麦に寄生しやすい。又、発病も助長しやすい。とくに雨で伝播する麦赤かび病菌は、特筆されるべき病害である。

### (1) 雨害と病害虫

麦(大麦、小麦)の病害で、雨の影響を最も受けるのは、赤かび病で、災害時には徹底した対策をたてるべきである。

#### ア 麦類赤かび病

本病は、通常乳熟期頃から穂に発生するが、平年の気象条件であれば特に問題はない。しかし、この時期に降雨が多くなると急激に伝播する性質がある。本病菌は、もともと種子や麦稈等(稲の刈株を含む)に付着して越冬しており、子のう胞子が空中を飛散して、開花後の葍や稈(ふ)の気孔から侵入し発病するので、この時期を防除の第1ポイントにすべきである。

第2のポイントは、その後、病斑上に形成される分生胞子によって伝染を繰り返すので、この防止対策をとるべきである。

したがって、感染の時期は、開花期-乳熟期が主であるが、発病の助長要因が、何といても雨であるので、曇雨天がつづき、さらに気温が20°C-27°Cの場合には注意が必要である。

#### (防除対策)

- a 防除時期 開花期-乳熟期頃を中心にしてその前後。(第1回穂揃期 第2回その後7日日頃)
- b 雨間利用 雨が降りつづくときは、雨間を利用して防除を実施する。
- c 防除薬剤 病害虫防除基準に準拠して防除適期を逃さないように留意して施用する。

#### イ 麦類うどんこ病

暖冬で、雨の多い年は発生しやすい。しかし、本病は、これ以外に、日蔭地で風通しの悪い場合チッ素肥料の多い場合も発生が助長される。

#### (防除対策)

- a 防除時期 発病初期に1-2回実施する。多発する予想年は出穂後も必要。
- b 防除農薬 病害虫防除基準に準拠して防除適期を逃さないように留意して施用する。